## 令和八年度・「税に関する高校生の作文」
## 神奈川税務署長賞・受賞作品

### 「模擬講義で変わった私の考え」

日本大学高等学校二年
今泉　優希菜

私は普段何かにお金を払うとき、自分の手元から余分に引かれている気がしてあまり税金に対してプラスの印象を抱いていなかった。しかし、先日大学のオープンキャンパスで、私は経済に興味があるため、経済学をベースに、法学や政治も学ぶプログラムの模擬講義を受けた。その際、大学の先生の『税金で損をしているように思うけれど、実は決してそんなことはない。』という言葉とその後の講義で私の考えは変わった。

模擬講義では税金や法律について学んだ。その中で私が特に驚いたのは、私たちが学校教育で受けている恩恵の大きさである。小学校、中学校、高校すべて公立の学校に通った場合、生徒一人あたり十二年間で約一千二百八十万円もの公的資金が投じられているというのだ。この時点で私は衝撃を受けたがその後さらに驚いた。なぜならこのお金を自分が将来社会に出て自分が納めていく税金で「返していく」と考えると、およそ十八年、十九年もかかると聞いたからだ。これは浪人や留年をせずに大学を卒業して働き始めても返し終わる頃には四十歳を過ぎる計算になる。私たちは今まで社会に出た大人たちから前払いの支援を受けて、学びの環境を守ってもらっていたのだと痛感した。

また、模擬講義で法律や租税法は一種の社会契約であるという話も聞いた。私たち国民が選んだ代表者が法律を作っている。つまりみんなで決めているということになる。だから、税金は一方的に国に取られるものではなく、私たちが安心・安全な社会を維持し、お互いを支えるために主体的に交わした契約なのだと理解できた。

一見すると手元のお金が減って損しているようにみえる税金も、自分が受け取ってきた恩恵や社会全体を巡る循環構造として捉え直せば、決して損などではない。オープンキャンパスでの講義を経て、私は税金に対する考えが変わった。そして、将来は社会に出て、しっかりと納税し今度は自分が次の世代を支えていきたいと思った。

## 令和八年度・「税に関する高校生の作文」
## 神奈川税務署長賞・受賞作品

### 「姉の日常を守る、税金と医療の温かい優しさ」

英理女子学院高等学校二年
田口　七菜実

私の姉には障がいがあり、毎日ヘルパーさんに家に来てもらって助けてもらっています。また、定期的な診察やリハビリのために「労災病院」にも通っています。そんな姉の日常を、私はずっと「普通のこと」だと思っていました。しかし、今回、「税金」について学ぶうちに、その何気ない毎日は、たくさんの人が払ってくれた税金によって支えられていることが分かりました。

一番驚いたのは、毎日お世話になっているヘルパーさんの費用についてです。調べてみると、姉が受けているサービスは、私たちが支払うのはわずか一割で、残りの九割は国や地域からの公費、つまり税金から出されていると知りました。もしこの仕組みがなければ一般の家庭が毎日のサポート代をすべて自分で払うのは絶対に不可能です。税金という支えがあるからこそ、障害を持つ姉も安心して暮らすことができ、私たち家族も笑顔で生活を続けられています。買い物で支払う消費税が、巡り巡って大好きな姉の暮らしを守っているのだと実感しました。

さらに、税金のありがたさを知ることができたのは姉がリハビリで使うオーダーメイドのコルセットを作ったときのことです。姉の体型に合わせた特注品のため、本当なら非常に高額な費用がかかります。しかし、国の補装具費支給制度のおかげで、その費用のほとんどを負担してもらえました。姉が通う労災病院も、国が働く人や地域の人々の健康を守るために設立した特別な病院です。姉が自分にあった器具を使い、安心してリハビリができるのは、税金によるサポートがあるからです。税金は、困っている人の体に寄り添うような優しさとなって、私たちを支えてくれていると分かりました。

これまで私は、税金に対して「お金をとるいやなもの」というマイナスなイメージしか持っていませんでした。しかし本当は、社会全体で困っている人を助け合い、みんなが安心して健康に暮らせるように使われていました。姉の生活や医療を通じて仕組みを知ることができたので、将来社会に出て働くようになったとき、今度は自分が誰かを支える番になりたいです。社会の一員としての責任をしっかり持って、税金を納める義務を果たせる大人になりたいと思います。

令和八年度・「税に関する高校生の作文」
神奈川税務署長賞・受賞作品

# 「未来へつなぐエレベーター」

日本大学高等学校二年
森　絢葉

私が中学校に通っていた時、学校にエレベーターが設置された。それまで階段の上り下りが本当に大変だった仲の良い車椅子の友達が、他の生徒と同じように移動できるようになった。私はその友達に付き添ってそのエレベーターに乗る機会があった。どんなに体が不自由でも、そのエレベーターを使えば次の授業に遅れることなく、みんなと同じ教室へ向かうことができる。その時私は、「このエレベーターは、誰が何のために作ってくれたのだろう。」と疑問に思った。そして高校二年生となり公共を学んでいる今、それが私たちの税金によって支えられているものなのだと知り、私は衝撃を受けた。

税金という言葉を聞くと、多くの人が負担で複雑といった少しネガティブなイメージを抱えがちだ。しかし、身近な学校にあるエレベーターを通して税金に対する見方が大きく変わった。税金とは、誰もが同じように学ぶ権利を守るための公平な仕組みなのだと気づいた。

もし税金がなければ、教育環境は家庭の経済力によって通える学校が制限されたり体の不自由な子が学校に通えなくなったりしてしまうかもしれない。どんな状況にあっても同じスタートラインに立って授業を受けられる。エレベーターを通じて、誰にでも等しく学ぶ権利があるのだという事を社会から教えてもらった気がした。

学校で毎日勉強ができて、やりたい事ができて友達と楽しく過ごすことができるのは当たり前のことではありません。顔も知らない誰かが未来のために納めた税金や支えてくれる社会のおかげで今の自分があるのだ。税金は、ただ今の生活を維持するためだけのお金ではなく、次の世代が未来をより良くするためのバトンだと思う。今度は私が、そのバトンを受け取って未来の子どもたちを支えていく番だ。

これから大人になって働くようになったら、税金をただ給料から引かれるものだと思いたくない。あの時助けてくれたエレベーターのように、次は私が誰かを助ける側となり、誰もが平等に学べる社会を守っていきたい。